

## 使役表現における中日両言語の視点について

高橋 弥守彦

### Concerning Causative Expressions from the Viewpoint of Chinese and Japanese

TAKAHASHI Yasuhiko

#### 概要

汉日两种语言的使令表达在使令义这一点上是一致的。本人认为，从汉日两种语言的句法体系所体现出来的使令表达来看，“施事者＋由于施事者的影响而受事者的行为和感情等”的使令义在汉日两种语言中是一致的。但若从语言事实来分析的话，汉语使令句的数量远比日语的使令句要多得多。同时，汉语的使令句不一定要翻译成日语的使令句，反之亦然。

中国是一个多民族国家，是由使用不同语言的诸多民族组成的。因此，可以说汉语是一种以主体为中心的逻辑型语言，其语言的重点在于明确地向对方传达主体的意思；而日本是一个单一民族国家，基本上是由使用同一种语言的单一民族构成的。因此，可以说日语是一种以客体为中心的关注型语言，其语言的重点在于句末表达多样性的人际关系上。两者的区别是：就同一件事而言，前者喜欢使用以主体为中心的主谓句，且容易表达主体意思的使令句，而后者则多倾向于使用以客体为中心的主动句（日语的能动句），且难以表达主体意思的被动句。这一特点恰好反映出日中两国国民看待问题的视点不同。

【キーワード】 使役のむすびつき 視座 視点 主体中心型 客体中心型

## 目次

0. はじめに
1. 対照言語学で扱う世界の言語
2. 中日両言語における文の体系
3. 使役表現における中日両言語の視点
4. おわりに

### 0. はじめに

言語類型論から見れば、中国語は孤立語、日本語は膠着語に属する。一般に前者は SVO 文型、後者は SOV 文型と言われ、中日両言語では語順が異なる。これは両言語に対する両国民の視点が異なることに起因する。しかし、どちらの言語であれ、言葉の世界は現実の世界を反映する。

中国語には連語と文レベルの各体系があるものの、形態変化に乏しい単形体文字の言語（漢字）なので、単語レベルでのヴォイスの体系がない。日本語は形態変化のある多形体文字の言語（漢字、平仮名、片仮名など）なので、単語レベルでもヴォイスの体系がある。連語と文レベルでももちろん各体系がある。体系の面からみれば、中日両言語では、連語と文レベルの対照研究が可能である。

本稿では先行研究と实例を分析することにより、体系の面から中日両言語における使役表現の視座と視点および使役義を表す連語と文との関係を明らかにする。

### 1. 対照言語学で扱う世界の言語

グリーンバーグ (1963)<sup>1)</sup>は、一般的な他動詞文に必須な三要素を主語 (Subject)、目的語 (Object)、動詞 (Verb) とし、言語事実から、世界の言語を以下の 6 類に分けている。これにより、世界の言語の種類を分かり易く概観できるようにさせたグリーンバーグの功績はきわめて大きい。

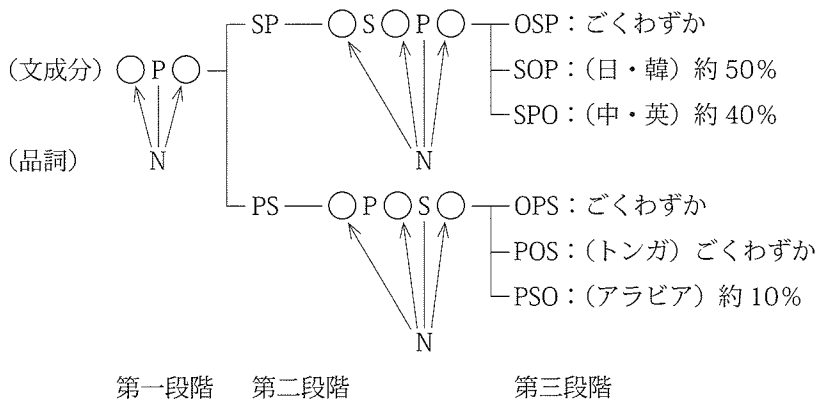
<sup>1)</sup> 山本秀樹 (2002 : 85) は言語類型論研究の専門家であり、その著にはグリーンバーグの学説が詳述されている。

[表1] グリーンバーグの分ける世界の言語

- i. SOV 型：日本語や韓国語などの語順で、世界の言語の約 50% を占める。
- ii. SVO 型：中国語や英語などの語順で、世界の言語の約 40% を占める。
- iii. VSO 型：アラビア語などの語順で、世界の言語の約 10% を占める。
- iv. VOS 型：トンガ語などの語順、ごくわずかである。
- v. OVS 型：世界の言語の中でもごくわずかである。
- vi. OSV 型：世界の言語の中でもごくわずかである。

本稿では、現実の世界と言葉の世界との関係に焦点を当て、どの言語でも最も重要だと言われる名詞・動詞・形容詞に注目して世界の言語を分類する。品詞は品詞の体系から文を組み立て、文成分は文成分の体系から文の分析に用いる単位と筆者は考えている。この観点にたてば、中国語は「SPO」、日本語は「SOP」文型である。下記に示す筆者の振り子理論<sup>2)</sup>によれば、世界の言語は [表2] のように3段階に系統化され体系化される。

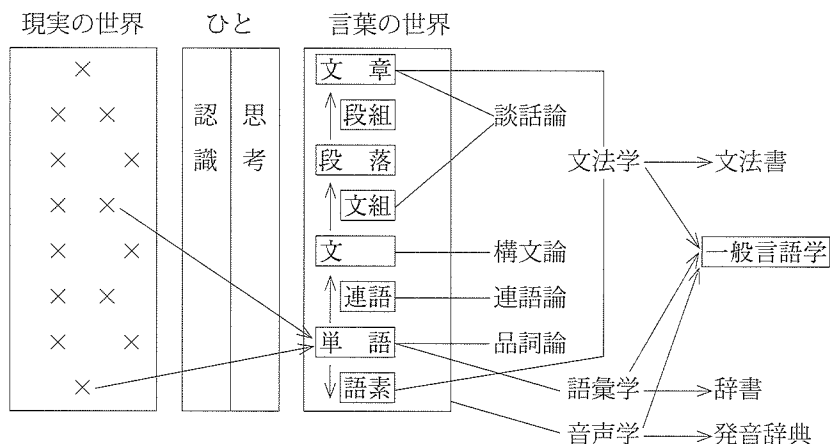
[表2] 振り子理論から見る世界の言語



<sup>2)</sup> 高橋弥守彦（2011：20～30）では振り子理論によって文成分を分析している。[表2]の振り子理論は修正版である。[表3]は現実の世界と言葉の世界の関係の修正版である。

私たちの話す言葉は、一般に語素（形態素）・単語・連語・文・文組・段落・段組・文章の8つの文法単位から体系的に成り立っている。8つの文法単位にはそれぞれの体系がある。ちなみに、現実の世界と言葉の世界との関係は、ヒトの認識と思考を介して、次のように図表化できる。

[表3] 現実の世界と言葉の世界との関係



## 2. 中日両言語における文の体系

中国語では“被字句”・“把字句”・主述文が互換関係<sup>3)</sup>にあると指摘されている。筆者は、かつて互換関係にある各種の文を分析し、その体系と意味関係<sup>4)</sup>を事例により明らかにしている。

<sup>3)</sup> 人民教育出版社中学語文室（1984：19）では、‘把字句、被字句和一般的“动词＋宾语”句有时候可以互相变换：小孩把玻璃杯摔破了。玻璃杯被小孩摔破了。小孩摔破了玻璃杯。’と説明し、基本的な文意の同じ互換可能な文が3例挙げられている。吕文华（2008：279）では、“被字句”と主述文との互換関係を3類に分けて、詳細な分析を行っている。房玉清（2008：215～219）では、3類の文の互換できる場合とできない場合を挙げ、その理由も言語事実に基づいて詳細に解説している。現段階の文法書としては一番詳しいであろう。興水優・島田亜実（2009：99）では、基本的な文意が同じ“被字句”と“把字句”の互換できる場合を挙げ、言語事実からの説明をしている。丸尾誠（2010：152）でも“被字句”と“把字句”の互換できる場合と共通点を挙げている。

<sup>4)</sup> 本稿の[表4]と[表5]は、高橋弥守彦（2014a：125）の修正版である。

[表 4] 文レベルの体系

- (1)他喝牛奶了。（“主谓句”）  
彼は牛乳を飲んだ。（筆者訳）
- (2)他把牛奶喝了。（“把字句”）  
彼は牛乳を飲んだ。（筆者訳）
- (3)牛奶他喝了。（“受事主体句”）  
牛乳は彼が飲んだ。（筆者訳）
- (4)牛奶被他喝了。（“被字句”）  
牛乳は彼に飲まれてしまった。（筆者訳）
- (5)母亲让他喝了牛奶。（“使令”）  
母親は彼に牛乳を飲ませた。（筆者訳）

[表 5] 一つの現実を表す文の体系（現実の世界：意味構造）

一つの現実 言葉の世界	主体+出来事	
主述文	仕手	仕手の行為や感情など（例 1）
“把”字構文	仕手	処置などによる対象の強調（例 2）
受事主体文	受け手	受け手の強調となる仕手の行為や感情など（例 3）
受身表現	受け手	仕手の影響を受ける行為や感情など（例 4）
使役表現	仕手	仕手の影響による受け手の行為や感情など（例 5）

言葉はヒトの認識と思考を介して現実を反映する<sup>5)</sup>。言葉は現実を反映するので、両者の関係は「はじめに現実ありき」である。現実がベースにない[私は空を飛べる。]というような文は、「空想の世界では」などの条件がなければ非文である。たとえ、それが嘘であっても、現実がベースになれば言語として成立しない。そのため、現代の各言語は高度に発達し体系化されているものの、社会の進展とともに現実が徐々に変化するので、それに対応する必要から、言語も徐々に変化し、単語も増え構造も新しく生まれ言語の体系も豊かになる。このように、言語は社会の変化とともに徐々に変化する。

<sup>5)</sup> 高橋弥守彦（2010：31）では、言葉の世界がヒトの認識と思考を介して現実の世界を反映する関係を体系的に図表化している。

この点は中国語も例外ではない。たとえば、中国語では、文化大革命時代の刑罰の一つ“坐飞机”がすでに死語となり、近年では“被留学”が新しく誕生している。

上掲の文（例1～5）も現実を反映し、主体と客体との関係に基づく視点のあてかたによって、一つの現実を異なる種類の文で表現している。一つの現実に対して種類の異なる文があるのは、主体と客体との関係が複雑なことを意味している。しかし、現実是一个なので、言語の体系から見れば、視点をどちらにあてるかにより、同一の現実を異なる種類の文で表現する一つの文体系とみなせる。

これとは別に、仕手主体が受け手客体にはたらきかける使役義を基本とする“使令句”の仕手主体と受け手客体には、どのような名詞が使われるのだろうか。筆者の調査（2013b）<sup>6)</sup>によれば、「仕手」と「受け手」にはよくヒト、組織、カラダ、モノ、コト、空間などが使われている。また、これらが省略されている場合もある。これに基づいて、筆者は中日両言語の名詞を以下のように分類<sup>7)</sup>している。

[表6] 名詞の分類

名詞	{	生命体：ヒト（動物も含む）、カラダ、植物（全体・部分）、組織
		非生命体：モノ、コト、心力（理性・感情・感覚など）、自然力（水・火・風・雷・音など）、空間、時間

日本語では以下の文の体系に見られるように、一つの現実には主体と客体との関係に基づき、文が作られる。誰や何に焦点をあてるかにより、文の種類がきまり、ヴォイスの体系のなかから、その文にふさわしいヴォイスが一つ選ばれる。主体を生命体とするか非生命体とするかにより、連語レベルと文

<sup>6)</sup> 本表は、高橋弥守彦（2013b：3）の名詞の分類表を修正したものである。

<sup>7)</sup> 李金蓮（2012：75～78）は名詞を“有生命”4類（“人：他，乡亲们”“动物：鸡，鲨鱼”“身体：脚，手掌”“集体：政府，学校”）と“无生命”3類（“自然力：风，洪水”“具体事物：书，绳子”“抽象事物：困惑，友谊”）の7類に分け、具体的な単語も挙げてしている。

レベルの表現が異なり、それぞれの体系が作られる。日本語はそれだけではなく、単語に語彙の意味と文法的意味があるため、単語レベル<sup>8)</sup>でも動詞の形態変化に見られるように、他動詞から自動詞までのヴォイスの体系<sup>9)</sup>を捉えることができる。

(6)次郎は汚水を（川に）流した。（他動詞、能動文）

(7)汚水は次郎によって（川に）流された。（受動態、受身文）

(8)太郎は次郎に汚水を（川に）流させた。（使役態、使役文）

(9)次郎は太郎に汚水を（川に）流させられた。（使役受動態、使役受動態文）

(10)汚水が（川に）流れた。（自動詞、能動文）

[表7] 一つの現実を表す文の体系（現実の世界：意味構造）

一つの現実 言葉の世界	主体 + 出来事	
能動文（他動詞）	仕手	仕手の行為や感情など（例6）
受身文	受け手	仕手の影響を受ける行為や感情など（例7）
使役文	仕手	仕手の影響による受け手の行為や感情など（例8）
使役受動文	仕手	受け手の影響を受ける仕手の行為や感情など（例9）
能動文（自動詞）	仕手	仕手（モノ）の動き（例10）

中日両言語の使役表現は、中国語は単語レベルであれば、動詞に形態変化がなく、日本語は形態変化があるので、両言語におけるヴォイスの体系の有無により単語レベルの対照研究は難しい。しかし、使役義を表す連語レベル<sup>10)</sup>と文レベルでの対照研究であれば、それが可能である。

<sup>8)</sup> 鈴木康之（2000：45）では、他動詞のヴォイスの体系により以下の文を作っている。なお、鈴木はヴォイスの体系は人間関係を表すことが基本であるとしている。上掲の例文は、それに基づいて鈴木康之が作例したものである。

太郎が次郎をなぐった。 次郎が太郎になぐられた。

三郎が太郎に次郎をなぐらせた。 太郎が三郎に次郎をなぐらせられた。

<sup>9)</sup> 鈴木康之（2014）では、[汚水の流れが（川に）現れた。]の類の文も挙げ、動詞 [流す／流れる] から名詞 [流れ] への転成も可能であるとしている。

<sup>10)</sup> 高橋弥守彦（2013b：74~78）では、連語レベルで作る日中両言語に共通するむすびつきを挙げている。

### 3. 使役表現における中日両言語の視点

中日両言語を含むどの言語であれ、一般には一つの現実に対して主体と客体との意味関係によって、主体が決まり一つの文が作られる。ここには一つの現実を異なる種類の文で作る〔表5〕〔表7〕などの文の体系がある。また、中国語で出来事のはじめに是非表現を用いるのは主体に視点があり、日本語で文末に是非表現を用い、文末表現が豊富なのは、客体に視点がある<sup>11)</sup>からである。

中日両言語は〔表5〕と〔表7〕からみれば、共通する種類の文が複数あると同時に、異なる種類の文もあり、それぞれ共通する文をベースにして異なる文もある独自の文体系を作っている。両言語を比較すると、両者の異同と特徴が出てくる。

筆者は上掲の文体系から中日両言語の使役義を「仕手の影響による受け手の行為や感情など」と規定している。また、先行研究と实例の分析と検討により、主体の意思の明瞭性を軸にして、中国語の使役表現をはたらきかけ・許可・影響の3用法に分け、日本語のそれも3用法に分けている。ただし、日本語の使役文は明瞭な意思を「はたらきかけ」とし、不明瞭な意思を「放任」と「許可」の2類に分け、無意思を「想定外」「影響」「再帰現象」の3類に分けている。

(11) “是他叫我来的，今晚的电影我已看第二遍了。”（『人民』90-9-85）

「彼が来させたの。今晚の映画、これで二回目よ」（同上）

(12) “让我看看你的眼睛。”（『人民』89-6-101）

「目を見せて」（『人民』89-6-100）

(13) 小李老师的讲课，真让人高兴。（『人民』88-1-94）

授業は素晴らしかった。（『人民』88-1-95）

例(11)は主体が客体に「はたらきかけ」「他叫我來」の意味を表し、例(12)は客体が主体に「許可」「让我看看你的眼睛」を求め、例(13)は主体の行為がもたらした「影響」「真让人高兴」を表している。これらはどの用法であれ、いずれも主体に視点が当てられている。

<sup>11)</sup> 高橋弥守彦（2014）では、中日両言語の視点から、中国語に使役表現が多く、日本語に受身表現が多いことを明らかにしている。



(14)すべての生き物に愛情を抱いていたからこそ、多くの木をよみがえらせることができた。（『天声人語解説』 p.89）

正因为他对所有生物都抱有爱心，所以大量的树木得以生还。（同上 p.92）

(15)起きている人は、もたれてくる人をなすがままにさせている。（『天声人語解説』 p.208）

没睡的人任凭别人依偎。（同上 p.211）

(16)加害者は姿を見せなくてもいい仕掛けだ。（『天声人語解説』 p.103）

这是允许肇事者不出面的手法。（同上 p.105）

(17)おとこの土曜日、福岡市で夢を見せてもらった。44の国や地域の子供が集う「アジア太平洋子ども会議」でのことだ。（『天声人語解説』 p.63）

前天星期六，我在福岡市看到了这里的市民实现了他们的梦想——44个国家或地区的孩子们欢聚一堂召开了“亚洲太平洋地区儿童大会”。（同上 p.66）

(18)アルコールは脳の働きをマヒさせる。（『天声人語』 ① p.26）

酒精会损伤脑的功能。（同上 p.32）

(19)市当局や商工会議所を中心とする建設促進派は、神経をとがらせている。（『天声人語解説』 p.54）

以市政府、商工会議所为中心的建设促进派神经紧张，……（同上 p.57）

日本語の使役文<sup>12)</sup>も意思の明瞭性を軸にすると、受け手客体に対する仕手主体のはたらきかけが基本である。例(14)は客体に対する主体の「明瞭な意思」(はたらきかけ) [多くの木をよみがえらせる]、例(15)は客体に対する主体の「不明瞭な意思」(放任) [もたれてくる人をなすがままにさせている]、例(16)は客体に対する主体の「不明瞭な意思」(許可) [姿を見せなくてもいい]、例(17)は主体の「無意思」(想定外) [夢を見せてもらった]、例(18)は客体に与

<sup>12)</sup> 高橋太郎ほか（1997：72～73）では使役動詞の用法として、1）本来（動作者に意図的に動作をおこなわせる）の用法、2）許可・放任の使役、3）他動詞相当の使役（無意志動詞の使役形式・自分の体の部分や装着物に対するはたらきかけ）に分けている。

える主体の「無意思」(影響) [脳の働きをマヒさせる] であり、例(19)は「無意思(感情)」「(再帰現象) [神経をとがらせている]」である。これらはどの用法であれ、いずれも主体に視点が当てられている。

一つの現実に対して、主体と客体との意味関係によって、文中に使役義を表す意味構造があれば、中日両言語ではいずれも使役表現を用いるが、中日両言語は視点の関係により、中国語では使役表現を多く用い、日本語ではあまり用いない傾向にある。

### 3.1. 使役表現と使役文

使役表現“使令句”は仕手主体の意思が文中に表れるのが特徴なので、視点は中日両言語とも仕手主体にある、と言える。中国語の使役表現は使役義を表す動詞を捉え、それらを“叫字句”“让字句”“使字句”“令字句”などと名付けている。

本稿では、この4種類の代表的な使役表現を研究対象とする。4種類の使役表現を調査すると、いろいろな訳出<sup>13)</sup>があり、必ずしも日本語の使役文で訳されているとは限らない。それを可能にしているのは、中日両言語に [表5] や [表7] のような一つの現実を表現する文の体系があるからである。また、翻訳は文意で訳すのであり、文の種類で訳すわけではないからである。しかし、文中の出来事に使役義があり、視点が「仕手主体」にあれば、もちろん使役文で訳される。

(20) 工作人员没吭声，只叫人去拿钥匙。(『人民』89-10-99)

検察係はそれには取り合わず、人にカギをとりに行かせた。(『人民』89-10-99)

(21) 利贞多日来一直为此筹划着，上慰老母，下让多多高兴。(『人民』89-1-99)

この日のために、ずいぶん前から、利貞はあれこれと準備におこたりなかった。老母を慰め、多多を喜ばせるためである。(同上)

例(20)(21)の使役表現はともに使役文で訳されている。どちらも原文の使役義

<sup>13)</sup> 高橋弥守彦 (2014b: 59) では、中国語の“被字句”は、日本語では受身文・能動文・使役文・使役受動態文などで訳されていると指摘し、その理由を説明している。

は「はたらきかけ」を表しているので、訳文も使役義は「はたらきかけ」で訳されている。

### 3.2. 使役表現と能動文

中国語の使役表現はすべて日本語の使役文で訳出されるとは限らない。以下の2例は、使役表現“使令句”が、日本語では能動文で訳されている。

(22)领导拍拍他肩膀，叫他等下批。（『人民』89-1-102）

この次のを待てと、上役は肩をたたいた。（同上）

(23)这简单的动作，却要叫我终生难忘了。（『講読』② p.21）

このなにげない行為が、わたしにとって生涯忘れがたいものとなった。（『講読』② p.24）

例(22)(23)の使役表現“使令句”は、視点を主体にあてているが、日本語ではともに他動詞を用いた能動文で訳されている。例(22)は分文中に現れていない主体と分文中に現れている客体がどちらもヒトであり、「はたらきかけ」を表している。(23)は主体がコト、客体がヒトであり、「影響」を表している。日本語は能動文であっても視点が客体にあるので、それが可能である。

### 3.3. 使役文と使役表現

日本語の使役文にも、いろいろな訳出<sup>14)</sup>があり、必ずしも中国語の使役表現“使令句”で訳されるとは限らない。それを可能にしているのは [表5] や [表7] のような文の体系があるからだろう。しかし、出来事の視点を「主体」として捉えることができれば、使役文はもちろん使役表現“使令句”で訳される。

(24)たずねてみると、それはこおろぎを飼う容器で、喧嘩をさせてあそぶらしい。（『水仙』 p.236）

一打听，才知道，是养蟋蟀用的，大概是人们让蟋蟀相斗，消遣。（『水

<sup>14)</sup> 高橋弥守彦（2014a：126～133）では、日本語の受身文が中国語では“被字句”・意味上の受身表現・語彙上の受身表現・主述文・非主述文・連述文・把字句”・“使令句”・“由／由于字句”・“有字句”・“是…的”文の11種類に訳される、と分析している。

仙』 p.237)

(25)メンバーを小チームに分け成果を競わせる。(『短評』 p.174)

他把成员分成小组，使他们互相竞争各自的成果。(同上)

例(24)(25)の使役文はともに使役表現“使令句”で訳されている。前者も後者も主体と客体はどちらもヒト（動物 [コオロギ] も含まれる）である。前者も後者も分文中や文中では主体が省略されているが、文レベルでは主体が明らかな場合であり、両者とも受け手客体に対する仕手主体の「はたらきかけ」を表している。たとえば、例(24)ではヒトがコオロギにはたらきかけて喧嘩をさせている。日中両言語がともに使役表現なのは、受け手客体に対する仕手主体のはたらきかけを表す視座が同じで、視点が「主体」にあると捉えているからである。

#### 3.4. 使役文と主述文

以下の2例は、日本語の使役文が中国語の主述文で訳されている場合である。使役文が主述文で訳される場合は相当数<sup>15)</sup>ある。

(26)現代の娘さんたちは、誰がために身を細らせるのだろう。(『天声人語』

② p.310)

现代的姑娘们是为谁瘦身呢? (同上 p.316)

(27)電磁波は約 20 センチの距離で心臓ペースメーカーを狂わせる恐れがある。(『天声人語』 ② p.144)

(如果手机的) 电磁波离心脏起搏器约 20 公分就有可能会对其造成干扰。(同上 p.149)

例(26)(27)の使役文はともに主述文で訳されている。(26)は主体がヒトで、客体がカラダであり、客体に対する主体の「はたらきかけ」を表している。例(27)は主体が自然力で、客体がモノで、客体に対する主体の「影響」を表している。日本語では視点を主体においた使役文であるが、中国語では視点を主体

<sup>15)</sup> 高橋弥守彦 (2014a : 128~130) では、主述文で訳す受身文として、「事実・一般認識・伝聞・固定」を表す文を挙げている。日本語では、これらは客観性を出すために主体の意思の表れない受身文を用い、中国語では主述文を用い客観性を出す傾向にある。

に於いた主述文である。日本語の使役文と中国語の主述文は視点がどちらも主体にあるので、使役文は主述文で訳されやすい。

### 3.5. 中日両言語の視点

3.1 から 3.4 の中日両言語をみると、どちらの言語であれ、一つの現実に対し、それぞれの言語にはそれぞれの文体系があることがうかがえる。これが [表5] と [表7] などである。

これらの言語現象から、翻訳は文の種類で訳すのではなく、言語環境に基づき、一つの文体系のなかから一つの文が選ばれ文意によって訳される、と言える。これはどの言語にも言えることであろう。それでは、同一種類の文なのに、なぜ視点が共通する場合とそうではない2種類の言語現象が現れるのだろうか。この疑問について、上掲に挙げる例文を検討することにより解明してみよう。

中日両言語は視座と視点とが同じであれば、同一種類の原文は同一種類の訳文で訳される。この条件に適合していれば、使役義を表す原文は使役義を表す訳文で訳される。上掲の文では、この原則に属するのが 3.1 と 3.3 に挙げる文である。それに反するのが 3.2 と 3.4 に挙げる文である。

3.1 の「使役表現と使役文」と 3.3 の「使役文と使役表現」の使役義を表す文は、中日両言語の意味構造を検討すると、どちらも使役表現を表す視座「仕手+仕手の影響による受け手の行為や感情など」が同じで使役表現の基本であるはたらきかけ性が明確であり、視点「仕手」も同じなので、仕手主体中心の使役義を表す文となる。

3.1 の例⑳に現れている使役表現としての視座“只叫人去拿钥匙”と分文中に現れていない仕手主体としての視点“工作人员”は、訳文においても同様である。訳文の視座は [人にカギをとりに行かせた] であり、視点は分文中に現れていない [檢察係は] で、受け手に対する仕手の「はたらきかけ」を表す使役義も同様である。

3.3 の例㉒に現れている使役表現としての視座 [喧嘩をさせてあそぶらしい] と文中に現れていない仕手主体としての視点 [飼い主 (人々)] は、訳文においても同様である。訳文の視座は“人们让蟋蟀相斗, 消遣”であり、

仕手主体としての視点は“人們”であり、受け手に対する仕手の「はたらきかけ」を表す使役義も同様なので、どちらも使役表現を用いている。

視点が異なってくると、使役義を表す文が非使役義を表す文で訳される。それが、3.2の「使役表現と能動文」および3.4の「使役文と主述文」である。それでは、なぜ3.2と3.4のように一方が使役表現、一方が非使役表現になるのであろうか。これらの日中両言語の視点はどこにあるのだろうか。

3.2の例(22)と(23)とは、中国語の使役表現“使令句”が日本語では能動文に訳されている例である。このような文はそうたくさんあるわけではない。中国語の使役表現は、視点を仕手において仕手主体の影響により受け手客体の行為や感情などの使役義が明らかな文でなければ使役表現を用いない<sup>16)</sup>。2例の中国語は仕手主体の意思が文中に表れ、仕手の影響による受け手客体の行為が明らかな、視点を仕手主体におく典型的な使役表現である。それにもかかわらず、日本語では他動詞を用いた能動文で訳されている。日本語の他動詞を用いる文は、一般に主体の意思が文中に表れる文である。これは主体がヒト名詞である既述の他動詞を用いる使役文(例8)とやはり他動詞を用いる能動文(例6)とを比較すれば理解し易いであろう。

中国語の主述文は主体に視点のある論理型言語<sup>17)</sup>であり、使役表現の視点も主体にある。使役表現は「はたらきかけ」を表すのが基本であり、主体の意思が強く出るので、個人の意思を強く出す傾向にある中国語では使役表現が多くなる。一方、日本語の能動文は客体に視点を当てる文末表現の多様な配慮型言語である。仕手主体の意思が文中に反映される使役文は、仕手主体に視点が当てられている。使役文は働きかけを表すのが基本であり、視点が能動文と異なるので、個人の意思を表面に出すことを好まない傾向にある日本語では使役文が少なくなる傾向にある。

主体に視点のある中国語の使役表現と客体に視点のある日本語の能動文では、文の種類は異なるが、日中両言語の文の体系から見れば、基本的には同

<sup>16)</sup> 高橋弥守彦 (2014a : 135) にこの説あり。

<sup>17)</sup> 高橋弥守彦 (2010 : 38) では、中国語の主述文は出来事の始めに是非表現のある論理型言語で、日本語の能動文は文末表現の豊かな配慮型言語である、と指摘している。なお、相手を見て失礼の内容に表現する日本語の待遇表現 (苑崇利 2008 : 97) も、日本語を配慮型言語という傍証となるであろう。

じ現実を表している。たとえば、例②の原文“领导拍拍他肩膀，叫他等下批。”では、出来事“叫他等下批”は分文中に現れていない仕手主体“领导”のはたらきかけを表している。日本語の訳文「この次のを待てと、上役は肩をたたいた。」の「この次のを待てと」もはたらきかけを表している。例②の原文と訳文を比較対照すると、仕手のはたらきかけによる一つの現実を一つの文体系から異なる種類の文で表現している、と言える。

3.4の例②⑥と⑦は、日本語の使役文が中国語では主述文で訳されている。このような文は相当数ある。日本語に使役文が少なく、中国語に主述文が多いのは、3.4節に属する文が多いからである。本節の日本語の2例は、視点を仕手主体におく仕手主体中心の使役文であり、仕手主体が受け手客体に対して「はたらきかけ」と「影響」を表している。中国語では主述文として訳されている。中国語の主述文は、主体に視点が当てられているので、出来事に仕手主体の意思が文中に表れる文である。これは主体がヒト名詞である既述の例①が傍証になるであろう。例②⑥のような客体に対する仕手の「はたらきかけ」を表す文は、仕手主体に視点があるので、主述文で表現する傾向にある。⑦は客体に対する主体の影響を表しているので、やはり主述文で現す傾向にある。

主体に視点のある日本語の使役文と主体に視点のある中国語の主述文は、両者の視点が同じなので、文の種類は異なるものの、日中両言語における文の体系から見れば、一つの現実を表しているので、主体と客体の関係が異なるだけで、基本的には同じ文意である。たとえば、例②⑥の原文「現代の娘さんたちは、誰がために身を細らせるのだろう。」の「身を細らせる」は、仕手主体中心で作る使役のむすびつきである。訳文の中国語“现代的姑娘们是为谁瘦身呢？”は、主述文により仕手主体中心の現実を表現する文である。例②⑥の原文と訳文とは、視点を変えることにより、それぞれの国民性に合った一つの現実を異なる種類の文で表現している、と言える。これが可能なのは一つの現実に対して、それぞれの言語に体系があるからである。

#### 4. おわりに

筆者の振り子理論により系統化され体系化される段階別言語類型論 [表 2]

によれば、第2段階までの中日両言語は同一の語順である。第2段階では語順が同じであっても、待遇表現が日本語では発達しているため、中日両言語ではすでに視点が異なっている。第3段階に入ると、中国語は「SPO」、日本語は「SOP」文型となり語順が異なってくる。これは環境の違いにより生じる中日両言語の視点の違いに由来しているため、視点の違いが一層明確になる。

中国は多民族国家であり、異なる言語を話す民族が多数存在する。この環境に対応する中国語“汉语”は主体に視点を当て、出来事の始めに主体の意思を正確に伝える主体中心型の論理型言語であり、必然的に主述文が多くなる。中国語の“使令句”は仕手に視点を当てる仕手主体中心の文なので、主体に視点を当てることを好む傾向にある中国語では使役表現を多く使う傾向にある。一方、日本は原則として単一民族国家であり、待遇表現が発達していると同時に、文末に多様な是非表現を用いる日本語は、相手を考慮する客体に視点を当てる客体中心型の配慮型言語であり、必然的に文末表現が多様となる。使役表現は仕手主体に視点をあてる「はたらきかけ」が基本なので、主体の意思を表面に出したくない傾向にある日本人は使役表現をあまり使わない傾向にある。

#### 【言語資料】

- 1) 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1996
- 2) 『中国語学講読シリーズ』①～⑥ 柯森耀訳 北京外文出版社 1991
- 3) 『天声人語解説』王锐主編 世界图书出版公司北京公司
- 4) 『天声人語集萃』①② 黄力游 林翠芳編 外语教学与研究出版社 2007 2011
- 5) 『日本時事コラムハイライト』《日本時事短評集萃》申秀逸編译 知识产权出版社 2014

#### 【参考文献】

- 1) 苑崇利 (2008) 『日本文化概観』外语教学与研究出版社
- 2) 木村英樹 (2012) 『中国語文法の意味とたち—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』白帝社
- 3) 工藤隆 (1999) 『ヤマト少数民族文化論』大修館書店
- 4) 興水優・島田亜実 (2009) 『中国語わかる文法』大修館書店『わかる』



- 5) 人民教育出版社中学语文室（1984）《中学教学语法系统提要（试用）》人民教育出版社
- 6) 鈴木康之（2000）『日本語学の常識』海山文化研究所
- 7) 鈴木康之（2014）講義録『連語論入門』
- 8) 戦慶勝（2008）「中国語の“兼語式”と日本語の使役表現について」《日本語文化研究—日語学框架と国際化視角》清华大学出版社
- 9) 高橋弥守彦（2010）「中日両言語の文型『SPO』と『SOP』について」『日中言語対照研究論集』第12号 日中対照言語学会 白帝社
- 10) 高橋弥守彦（2011）『中日対照言語学概論—文法編（試行本）—』日本語文法研究会
- 11) 高橋弥守彦（2013a）『中日対照言語学概論—文法編—』日本語文法研究会
- 12) 高橋弥守彦（2013b）「日中両言語における受身のむすびつき」『研究会報告』第34号 日本語文法研究会
- 13) 高橋弥守彦（2014a）「実例から見る日本語受身文の翻訳傾向について」『中国言語文化学研究第3号』大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
- 14) 高橋弥守彦（2014b）「日本語受身文の中国語訳について」『日中言語対照研究論集』第16号 日中対照言語学会 白帝社
- 15) 房玉清（2008）《实用汉语语法》北京语言大学出版社《实用》
- 16) 宮田幸一（2009）『日本語文法の輪郭』くろしお出版
- 17) 丸尾誠（2010）『基礎から発展までよくわかる中国語文法』アスク出版『よくわかる』
- 18) 山本秀樹（2002）「世界諸言語の語順類型研究における諸問題」『人文社会論争、人文科学篇』7弘前大学人文学部
- 19) 楊凱榮（1985）「使役表現について—中国語との対照を通じて—」『日本語学』明治書院
- 20) 李金蓮（2012）《日汉被动句对比研究》山东大学出版社
- 21) 吕文华（2008）《对外汉语教学语法探讨》北京语言大学出版社